

わが国におけるヒューマニスティック・サイコアプローチの発展と課題

日時：8月2日（土） 9:30～11:30

場所：大ホール

企画：日本人間性心理学会理事会

司会者：藤中 隆久（熊本大学）

話題提供者

野島 一彦（九州大学大学院）	パーソンセンタード・アプローチの立場から
中西 龍一（園田学園女子大学）	ゲシュタルト・アプローチの立場から
葛西 俊治（札幌学院大学）	身体心理学的アプローチの立場から
伊藤 義美（名古屋大学大学院）	フォーカシング・アプローチの立場から

指定討論者

清水 幹夫（法政大学）

企画の趣旨

わが国のこれまでのヒューマニスティック・サイコアプローチの発展を振り返り、現状を確認し、今後の発展上の課題を明確にする。

はじめに

人間性心理学の立場に立つ、あるいはその影響を受けたサイコセラピーやアプローチには様々なものがあり、他のアプローチとも相互に影響を与えながら誕生・進化・発展してきている。本企画は、わが国における主要なヒューマニスティック・サイコアプローチのこれまでの発展を振り返り、現状を確認し、今後の発展上の課題を明確にしようとするものである。ヒューマニスティック・サイコセラピーとすると狭くなるので、ヒューマニスティック・サイコアプローチとした。また、どの立場を取り上げるかという重要な問題もあるが、今回はパーソンセンタード・アプローチ、身体心理学的アプローチ、ゲシュタルト・アプローチ、フォーカシング・アプローチを取り上げた。

1. 私が心理臨床家をめざすようになった動機
2. 私が九州大学で学んだ時期 = 1966 ~ 1979 年 : 18 ~ 31 歳
3. 私が九州大学を離れていた時期 = 1979 ~ 1996 年 : 31 ~ 48 歳
4. 私が九州大学で教える時期 = 1996 年 ~ 現在 : 48 歳 ~ 61 歳
5. これからやりたいこと

〈略歴〉現在, 九州大学大学院人間環境学研究院 教授
博士 (教育心理学), 1975 年 3 月 : 九州大学大学院教育
学研究科教育心理学専攻博士課程単位取得後退学, 1975
年 4 月 : 九州大学教育学部助手, 1979 年 4 月 : 久留米
信愛女学院短期大学助教授, 1985 年 10 月 : 福岡大学人
文学部教授, 1996 年 4 月 : 九州大学教育学部附属発達臨
床心理センター助教授, 1998 年 12 月 : 博士 (教育心理
学), 九州大学, 2000 年 4 月 : 九州大学大学院人間環
境学研究院教授

〈著書・編書〉『臨床心理地援助研究セミナー』(野島一彦
編) 2006.11 現代のエスプリ別冊 至文堂, 『エン
カウンター・グループと国際交流』(松本 剛・島瀬直
子・野島一彦編) 2005.10 ナカニシヤ出版, 『HIV

と心理臨床』(野島一彦・矢永由里子編) 2002.10 ナ
カニシヤ出版, 『エンカウンター・グループのファシリ
テーション』(野島一彦著) 2000.9 ナカニシヤ出版,
『パーソンセンタード・アプローチ---21 世紀の人間関係
を拓く』(伊藤義美・増田 實・野島一彦編) 第 11 章
「ファシリテーション技法の体系化」(p.139-148)
1999.12 ナカニシヤ出版 『グループ・アプローチ』(野
島一彦編) 1999.8 現代のエスプリ No.385 至文堂

〈発表主旨〉パーソンセンタード・アプローチの立場をと
ってきた私自身について, ①私が心理臨床家をめざすよ
うになった動機, ②私が九州大学で学んだ時期, ③私が
九州大学を離れていた時期, ④私が九州大学で教える時
期, ⑤これからやりたいこと, について語りたい。

グシュタルト・アプローチの立場から

中西 龍一 (園田学園女子大学)

1982 年に私は学部卒で精神科の心理士として働き始めました。殆ど専門性を持たないものが専門職に就いた
わけで、随分無謀なことをしたものだと思えながら驚きます。しかし当時「心理学」を冠する学科の多くは、基
礎系が主流で、臨床心理を目指すものは、学部卒で心理職に就くことも珍しくない頃でした。また、実務で求め
られるものはインテーク面接と心理査定が中心で、心理士が行うカウンセリングは、レクリエーションと同じ
ような扱いを受けていたように思います。医師には「ロールシャッハ検査なんか尿検査と同じだ」と言われ、
看護師さんには「心理なんて男が一生を賭けてやる仕事じゃない」などと言われたのもこの頃でした。

そのようななか、サイコセラピストを夢見ていた私は大いに焦りました。書店の書架には様々な心理療法に
関する書籍が並んでいるのですが、それを学ぶ場が見つかりません。週末や仕事の後で Freud, Jung, 家族療法,
エンカウンター, ボディーワークと様々な勉強会やワークショップに参加しました。大学の先輩を介してグシ
ュタルト療法の倉戸ヨシヤ先生に出会ったのもちょうどその頃でした。初対面の先生の研究室に、菓子折を持
って一人でおしかけた日のことを今でも鮮明に覚えています。結局私はグシュタルト療法を選んでいくので
すが、その理由は、セラピストのクライアントへの関与の仕方にあったと思います。当時は人間性の意味すら十分
に理解していなかったのですが、今にして思えば当を得た理由で選んでいたことに気づきます。その後、倉戸先
生が主宰する日本グシュタルト研究所 50 セッション 125 時間訓練、およびグシュタルト療法家スーパービジ
ョンを受ける機会を得ました。どちらも足かけ 2 年に渡るプログラムで、月に一度泊まりがけで行われるも
のでした。最初の 50 セッションは参加者のワークが中心で、セラピーの展開や認知の転換を目の当たりにし、自
分自身もそれを何度となく体験することができました。グシュタルト療法家スーパービジョンでは、個人ワー
クも行われましたが、理論の講義や、訓練生同士のロールプレイング、参加者を募っての訓練生によるワークシ
ョップなどが行われました。米国留学中、Gestalt therapy training workshop にも参加しましたが、それはむしろ
日本で受けたトレーニングの質の高さを印象づけるものでした。

現在、臨床現場や教育活動でグシュタルト療法を実践し、講座や集中講義でグシュタルト療法を指導してい

ます。私は幸運にも非常に濃密なトレーニングを受ける機会を与えられましたが、今後人間性心理学の様々な療法を体得しようとする人たちにこのようなトレーニングの機会が開かれることを願ってやみません。

〈略歴〉現在、園田学園女子大学人間教育学部 教授 医療法人社団杉本医院臨床心理士。

学歴：1956年生、同志社大学大学院博士課程前期修了文学修士 Central Washington Univ. 大学院修士課程修了 M.S.

略歴：松下電器健康保険組合松下病院、京都 YMCA 相談室カウンセラー、京都市教育委員会嘱託カウンセラー、三幸会北山病院非常勤心理士を経て現職。

〈著書・訳書〉グシュタルト療法パーベイティム（仮題）分担翻訳 ナカニシヤ出版（出版決定済み）、「街の精神科クリニックにおけるグシュタルト療法」至文堂 現代のエスプリ No.467 エンプティ・チェアの心理臨床、「パウルズ著『グシュタルト療法』解題」至文堂 現代のエスプリ No.375 グシュタルト療法ほか。

〈発表主旨〉

「わが国におけるヒューマンスティック・サイコアプローチの発展と課題」という理事会主催のシンポジウムに、「グシュタルト・アプローチの立場から」という役割でシンポジストを拝命しました。しかし、1982年（日本人間性心理学会創立の年）に精神科の心理士として歩み始めた私は、まさにその発展の中でセラピストとして育てられ、現在に至るため、わが国における発展を振り返るといった資格もなければ、将来を展望する重責を果たすこともできそうにありません。そこで今回、私がどのようにグシュタルト・セラピーと出会い、どのような経験をし、その中で今どのように考えているかというきわめて私的な意見を述べさせていただくことで、私なりにシンポジストとしての責務を果たしたいと考えております。

身体心理学的アプローチの立場から

葛西 俊治（札幌学院大学）

1983年にC. ロジャーズが来日した際の大会にて竹内敏晴氏に出会って以来、身体心理学・身体心理療法アプローチを今日まで続け、特に「暗黒舞踏」という現場に身を挺して公演活動（海外15都市以上）を行う中、1999年以降、精神科デイケアにて「ダンスセラピー」という枠組みで実践を積み重ねてきた。そうした身体心理学的アプローチの実質と意義を明らかにする。

〈略歴〉現在、札幌学院大学人文学部 教授。s.54 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程（心理学）単位取得満期退学、s.54 北海道大学文学部行動科学科基礎行動学講座助手、s.57 北海道工業大学教養部講師、s.64 北海道工業大学総合教育研究部助教授、H.16 札幌学院大学人文学部臨床心理学科教授（現在に至る）

〈著書・論文〉著書：『行動をソフトに科学する』青山社 2002 論文：「関連性評定質的分析による逐語録研究 — その基本的な考え方と分析の実際 —」札幌学院大学人文学部紀要 第83号、61-100、2008、「身体心理療法の基本原理とボディラーニング・セラピーの視点」札幌学院大学人文学部紀要 第80号、pp.85-141、2006、「心理学的研究における統計的有意性検定の適用限界」札幌学院

大学人文学部紀要 第79号、pp.45-78、2006、「舞踏ダンスメソッドにおけるスピリチュアルなところとからだ」人間性心理学研究 92-100、Vol.21、NO.1、2003、Toshiharu Kasai and Kate Parsons "Perception in Butoh Dance" Memoirs of Hokkaido Institute of Technology、257-264、No.31、2003.

〈発表主旨〉1983年にC.ロジャーズが来日した際の大会にて竹内敏晴氏に出会って以来、身体心理学・身体心理療法アプローチを今日まで続け、特に「暗黒舞踏」という現場に身を挺して公演活動（海外15都市以上）を行う中、1999年以降、精神科デイケアにて「ダンスセラピー」という枠組みで実践を積み重ねてきた。そうした身体心理学的アプローチの実質と意義を明らかにする。

フォーカシング・アプローチの立場から

伊藤 義美（名古屋大学大学院）

フォーカシング（当時は、焦点づけまたは、焦点づけ技法と呼ばれていた）に実際に触れたのは、ジェンドリン（Gendlin, E.T., 1926~）が来日して行った日本心理学会第42回大会での特別講演「体験過程療法」（1978年10月）であった。その直後のフォーカシング・ワークショップに参加して、フェルトセンスやショートフォー

ムを学び、カウンセリングの中で実践してみた。名古屋に帰ってジェンドリン夫妻の夢もみた。ジェンドリン夫妻はさらに1987年に来日し、夢のフォーカシングを伝えてくれた。私はシカゴ大学に客員研究員（文部省在外研究員、1993～1994）としてフォーカシングの実践や研究に取り組む機会を与えられ、国際会議・学会に出席したり、長良川フォーカシングWSの開催や月例会的なフォーカシングの教育訓練、及びセルフヘルプ・フォーカシングの構築に細々ながら取り組んできている。

フォーカシングの実践者や研究者の、いわば「専門家による、専門家のため」の『日本フォーカシング研究会』にかわって、フォーカシング愛好者のための『日本フォーカシング協会』が設立され、多くの人々に開放されるようになってきている。フォーカシングの実践者や研究者が何人か来日してワークショップが開かれ、フォーカシング関連の書物も何冊かわが国に翻訳・紹介されている。第21回フォーカシング国際会議が来年（2009.5.12-16）日本で開催される予定である。フォーカシングはわが国でも急速な広がりを見せ、フォーカシング・ムーブメントあるいはフォーカシング・ブームの様相さえ呈している。「専門家と市民の協働」を経て、「市民による、市民のためのフォーカシング」の時代の到来を予感させる。フォーカシング・コミュニティが世界的な規模で形成されつつある。わが国では、研究発表もかなり盛んである。しかし一方では、フォーカシング・トレーナーの教育・養成・資格の問題があり、臨床実践場面でのフォーカシングの活用（専門化や深化の方向）がやや低調ではないかという危惧がなくはない。フォーカシングはどこへ行くのか、どこへ行こうとしているのか、自分なりのフォーカシング・アプローチの今後の課題にも触れたいと考えている。

〈略歴〉現在、名古屋大学大学院環境学研究科心理学講座
教授 博士（教育心理学）

〈著書・編書・訳書〉「現代臨床心理学」（編、ナカニシヤ出版、2008）、「フォーカシングの展開」（編、ナカニシヤ出版、2005）、「パーソンセンタード・エンカウンターグループ」（編、ナカニシヤ出版、2005）、「ロジャーズ：クライアント中心療法の現在」（共著、日本評論社、2004）、「ロジャーズ学派の現在」（共著、至文堂、2003）、「ヒューマニスティック・グループアプローチ」（編、ナカニシヤ出版、2002）、「フォーカシングの実践と研究」（編、ナ

カニシヤ出版、2002）、「パーソンセンタード・カウンセリング」（訳、ナカニシヤ出版、2000）、「いのちとこころのカウンセリング：体験的フォーカシング法」（共訳、金剛出版、2000）、「フォーカシングの空間づくりに関する研究」（単著、風間書房、2000）、「パーソンセンタード・アプローチ」（共編、ナカニシヤ出版、1999）など。

〈発表主旨〉フォーカシングに関心をもち、自分なりにフォーカシング・アプローチに取り組んできたプロセスを振り返るとともに、フォーカシング・アプローチの発展の現状と傾向および今後の課題について明らかにしてみたい。

指定討論の立場から

清水 幹夫（法政大学）

所属大学の在外研究制度（2007年度）を利用して、スコットランドの、PCA（Person-Centered Approach）に特化した、特に大学におけるカウンセラー資格コースの成立過程や現状と課題を調査して来たので、カリキュラム、リサーチの活用、スーパービジョン、実習、資格制度などの視点から討論に加わりたいと思っている。

〈略歴〉現在、法政大学

〈発表主旨〉所属大学の在外研究制度（2007年度）を利用して、スコットランドの、PCA（Person-Centered Approach）に特化した、特に大学におけるカウンセラー

資格コースの成立過程や現状と課題を調査して来ましたので、カリキュラム、リサーチの活用、スーパービジョン、実習、資格制度などの視点から討論に加わりたいと思っています。

おわりに

わが国におけるヒューマニスティック・サイコアプローチには、今回取り上げられなかったもの以外にも多くのアプローチがある。それらについては、当日の参加者の皆様からご発言をいただき、シンポジウムが刺激的で有意義な交流の場になることを願っている次第である。